

びわこの 考湖学

34

寛文12(1672)年、河村瑞賢によって拓かれた西廻り航路が広く利用されることによって、日本海側の物資が敦賀、小浜で陸揚げする必要がなくなったことから、琵琶湖を経由する物資の量が激減し、琵琶湖水運は大打撃を受けました。

しかし、北海道の物産は琵琶湖を経由して京・大坂へと持ち込まれました。その背景には近江商人がいたのです。

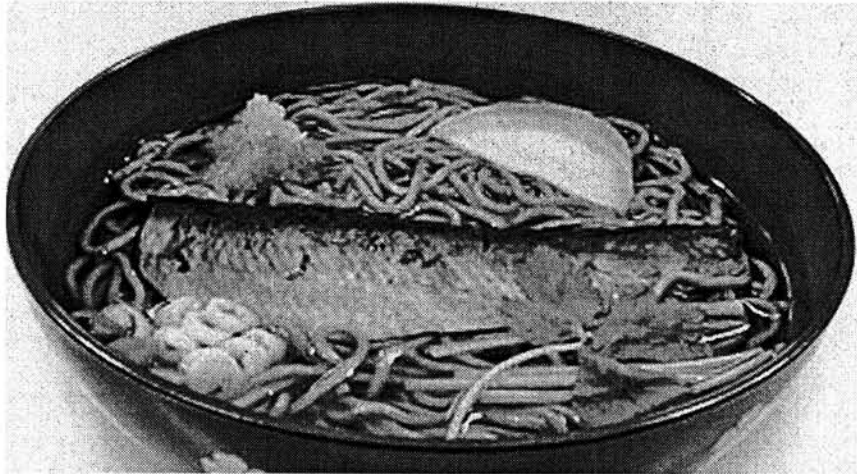
天正16(1588)年、柳川(現在の彦根市)出身の田付新助と建部七郎右衛門が北海道に渡り、蔬菜の種子を持参して商売を始めました。彼らに続いて松前や江刺に入った近江商人の出身地の大半が八幡と柳川、薩摩(いずれも現在の彦根市)で、寛永年間(1624~1644年)に集

中して北海道へと渡ったようです。

松前の近江商人は、呉服や荒物など日用品を上方から仕入れ、松前の物資を上方に売るといふ商売を展開していました。米をはじめとして内地同様の物資を得ることができない松前藩にとって、近江商人は得がたい存在でした。

また、松前藩の武士たちは、それぞれに与えられた海岸線ごとに漁場を設けて、そこでアイヌの人々が収穫したニシンやサケといった海産物を彼らの必需品と交換し、その差益を各自の収入としていました。従って良い漁場を開拓することが「高収入」につながる

北海道の近江商人



にしん蕎麦でお馴染みのニシンは、かつては近江商人らが北海道からもたらした

のですが、漁業経営にかかわることは武士たちにとっては困難な仕事であったことから、商人に権利を貸し与え、その賃料(運上金)を受け取ることによって生計を立てていたのです。

商人たちは漁場を運営し、ここで獲れた海産物を干物などに加工し、近江を経て京・大坂に送り、日用品や米、衣料などをもたらしたのです。ちなみに京都の「にしん蕎麦」は明治時代に誕生したのですが、

京都の庶民料理(おばんざい)である松前からもたらされたニシンの昆布巻きにヒントを得たものだそうです。

彼らは敦賀、小浜方面と松前を結ぶ「荷所船仲間」と密接に連携することによって松前藩に安定的に物資を供給しました。さらには松前の近江商人全体が「両浜組」という仲間組織を結

成し、共同歩調をとることにより、より安定度を増したのです。

数ある商人の中で最大の勢力であった「両浜組」は藩主のお目通りがなかったり、課税が減免されるなどの優遇措置を受け、松前の近江商人は繁栄を極めました。

ところが、好事魔多し、というのでしょうか。

寛政4(1792)年のロシア使節ラクスマンの根室来航や、寛政8(1796)年のイギリス人プロートンの内浦湾探検などを機に、幕府は北海道の太平洋一帯を取り上げて直轄領として函館に奉行所を置きま

す。

このころから、松前藩と密接な関係にあった近江商人の繁栄にかけりが見え始めます。近江商人に代わって登場したのが司馬遼太郎の『菜の花の沖』でも有名な淡路出身の高田屋嘉兵衛らでした。

漁場運営、京・大坂へ海産物

(滋賀県文化財保護協会)

畑中英二